[学会記録]「ヨーロッパとアラビアの学際交流--マルタ島の第二回ユーロ・アラブ大学」
『地中会学会月報』105号 1987年12月 pp.5-6.

ヨーロッパとアラビアの学際交流

——マルタ島の第2回ユーロ・アラブ夏期大学に招かれて——

稲賀　繁美

西欧とアラブ世界，アフリカとヨーロッパ，イスラームとカトリックという対立項の要，マルタ島はその政治地理的な特性から言っても，地中海文明省察には欠かせぬ一要衝であろう。本年で第2回目を迎えるユーロ・アラブ夏期移動大学は，まことに適切な開催地を得たと言うべきである。たまたま縁あって，4週間に渉る同学会中第1週目，「思想，知，社会行動様式の交差点」と題するパネルに出席する機会を得た。つづく週には文学，芸術，国際関係等が予定され，のべの発表数は120名に達すると伺った。もっとも各週の参加者は40名強で，討論には理想的な人数である。以下7月13日から1週間の発表概要を，簡略にご報告申し上げる次第である。

開催日につづく実質第1日目の14日は，欧州共同体傘下の「文明相互理解のための国際機関」Transcultura の手にゆだねられた。同学会は本年6月，ベルギーでの国際学会を皮切りに西欧と非西欧の学術的交流を，ボルドー大学，ベルリン自由大学，ルーヴァン大学，ボローニャ大学，北京大学，孫文大学等との協賛の下に推進し，あわせて国際間理解の理論的研究に貢献しようとする機関である（連絡先：1, allée de clerlande, B-1340, Ottignies, Belgique）。まずアゾレス諸島からの来客リュイ・デ・スーサ氏が諸文明の交差点として，揺れ動く帰属意識と統一されぬ相互依存の地方諸権力との織目に結節する島嶼複合文化を軸に，地中海島嶼文明とアゾレス群島との文化比較を試みたのについで，稲賀はマルタ島を訪れた最後の幕府使節，徳川昭武の洋画修行を枕に，絵画におけるオリエンタリスムと極東の美術における西欧化との相互誤解を介した芸術創造の弁証法を説いた。ついでパスカル・ド・ペルテュイ夫人が自らのアラブ文明との出会いを現象学的に分析してみせた後，レバノンの憂国詩人ジョセフ・サイエグ氏が，イスラームによって詩文が聖典に回収されてしまう以前の遊牧アラブの詩魂の原初形態を，その砂漠でのテント暮らし（Bait min chaar）と不二なる詩の理念（Baît min chiir）のうちに求めようとする強烈な自己証明と歴史意識に貫かれた発表を行い，アラブの詩魂の魂振りを会場にもたらした。

第3日は間文化協会ARICの協力の下，ヨーロッパとアラブの文化交渉に話題がしぼられた。まずバルセロナ大学の碩学ヴェルネ教授による，天文学知識の東西伝播に関する詳細な文献学的研究。ついで，ベルベル出身のモアタッシム氏による，マグレブでのアラビア語教育のかかえる諸問題に関する報告。おしまいはアルジェリア出身の精神科医ベネガディ博士による，マグレブからのフランス移民の精神疾患に関する考察。

モアタッシム氏の話は，子供の保護育成とか国語といった概念が国家次元の価値観を前提としており，その見地からなされた社会学的調査がむしろ村落のかかえる現実的問題を隠蔽せずにはおかないジレンマを見せつけた。フランス語吹き換えの『ダラス』放映時間になると礼拝の時刻より街行く人影が少なくなるという社会的現実は学校教育におけるアラビザシオンといったイデオロギーの虚構性をあまりにも雄弁に語っている。

マグレブ三国においてアラビア語とフランス語とは例えて言えばちぐはぐな左右の靴のようなもので，どちらも中途半端だからといって片方を脱ぎ捨てるわけにはいかない。こうした文化複合の煮詰まったところに出現するのが，移民の精神病理である。愛とは喪失であり必要とは憎悪でしかない，という移民環境に加えて，フランス在住のムスリムの場合，出身国に根ざすアイデンティティ意識が希薄であるという。根が問題なのではなく，移住状況という根なしの性格が，ネガティヴな自己認識の鍵として析出してくる。

他への依存性のうちにしか自己を把握できないという不利は，被植民地性の転移であるばかりか，医療行為における看る者と看られる者の関係にも，すでに言葉の次元からして再生産されてしまう。この時医師の眼は，癒す者としての一方的優位に立つことはもはやできない。医師の立場それ自体が精神障害発生の構図に内的に組み込まれ，医師に自己分析をせまるからである。

話ここに至って，ユダヤ的知性を無視するわけには行くまい。4日目には受け入れ側，マルタの国際研究基金FISの協力の下，「地中海の島々，綜合と間文化性の場」と題して五つの報告があったが，果たしてその中でチュニジアの作家ギダ氏は，かの『オデュッセイアー』はロートスの島，ジェルバ島の文化史を語った。地中海交易の北アフリカ側の要であったこの地で，ユダヤ人金細工師は，イスラーム・ジャンセニストとも称すべきイバディットたちと共存関係にあった。異文化間の整流子たる

役割りこそユダヤに負わされた文化的な傷ではないか。傷というのはそこに秘められた絶対的な他者性（アルテリテ）の謂であって，その「非属」性ないし非「属性」こそが文化間の媒介をとりもつ負の項となる。そして島という装置こそ，学会組織者アジザ氏が「島の詩学」と題して語ったように，混交のうちにしか自らの個性を宿し得ぬというその非帰属性において，移民状況の究極的な隠喩であり，特権的な自己省察の場たり得るのである。

同セッションでは今ひとつ，パリの地中海文明研究国際協会（International Association for the Study of Mediterranean Civilisation）のガレ夫人の報告に触れておきたい。ユーロ・アラブ大学の理念をはからずも体現する好論だったからである。地中海地域に広く分布するバラッドのひとつに「マルタの花嫁」と題する，海賊に奪われた乙女の話がある。マルタの伝承では海賊とはトルコを指すがチュニジアの伝承では逆にキリスト教徒が海賊となる。連れ去られた先で乙女は盛装をほどこされ，王妃にして進ぜようと厚遇されるが，これはカトリックからイスラームへの，ないしその逆の改宗，つまりは宗教的裏切りたらざるを得ない。シチリアに伝わる歌詞では乙女は身を投げ，悲しい結末に至る。けれどもこれらの伝承は必ずしも融和なき反目ばかりを哀歌に託したわけではない。他ならぬサラディーンこそキリスト教界からも最高の騎士道者と見做され，異教徒間（といっては不正確だが）の愛と和解とを示唆する物語を生んだのではなかったか。バラッドが語るのは地中海文明の生きざまが縮図として形象したひとつの夢である。

最終日には，「世界におけるアラブ・イスラーム，地中海研究」と銘うって，午前午後計九つの発表が行われた。ここで詳述された研究史解説と近年の傾向とをこの場に要約する愚を犯す代わりに筆者の印象を論べることを許していただけるなら，それはイスラーム・アラブ研究が「中東」地域研究として良きにつけ悪しきにつけ負わずにはいられぬ政治的歴史的脈絡の根深かさへの今さらながらの驚愕である。

合衆国の中世哲学研究者バターウォースが厳密に哲学を政治・宗教と区別して議論をすすめようとしたのは，チュニジア出身の南フロリダ大学教授ヘシシェ氏の合衆国での中東研究に対するほとんど内部告発的な批判を予想しての予防線であったし，他方座長をつとめたテンプル大学のセリン氏が黒アフリカ文学研究とは違ってもっぱら日陰者的研究領域にとどまっている米国アラブ文学研究のまことにお寒い手の内を隠さなかったのに対して，カイロ出身，ニューヨーク大学のミハイエル夫人は「地域研究」としてイスラーム文学を合衆国アカデミスムの内で講ずることに，解放されたアラブ女性としての自己実現の成就を確認する。さらには，イスラーム文化が抑圧と搾取の対象となってその文化的可能性を発揮していない現状に義憤を隠さぬソビエトのシャガール氏の熱情と使命感に対しては，むしろそのような姿勢がアラビア文化復興の名の下に社会主義帝国主義の浸透を正当化する隠れ蓑となっているのではないかとミハイエル女史が攻撃し，それに対しては今ひとりのソビエト代表キルピチェンコ夫人が政治と科学の混同は時代遅れで解決済みとやり返したりもした。

アメリカ合衆国勢がそろって見事なフランス語使いだったのに対してイギリス連邦勢がいずれもフランス語を解さず少数派の境遇をかこっていたのも何か象徴的で，南アジアにおけるイスラーム研究の現状報告をしたオックスフォードのニザミ氏こそ，黒いイギリス人生産を旨とする植民地時代の教育システムに順応したイギリス帰りのイスラーム研究という自己疎外に対する揶揄的自己批判も臆されなかったが，キプロスを専門とするケンブリッジのカッシア教授ともども早口でそつのない距離を保った総括に，英国風の非政治的学風を見直した思いであった。

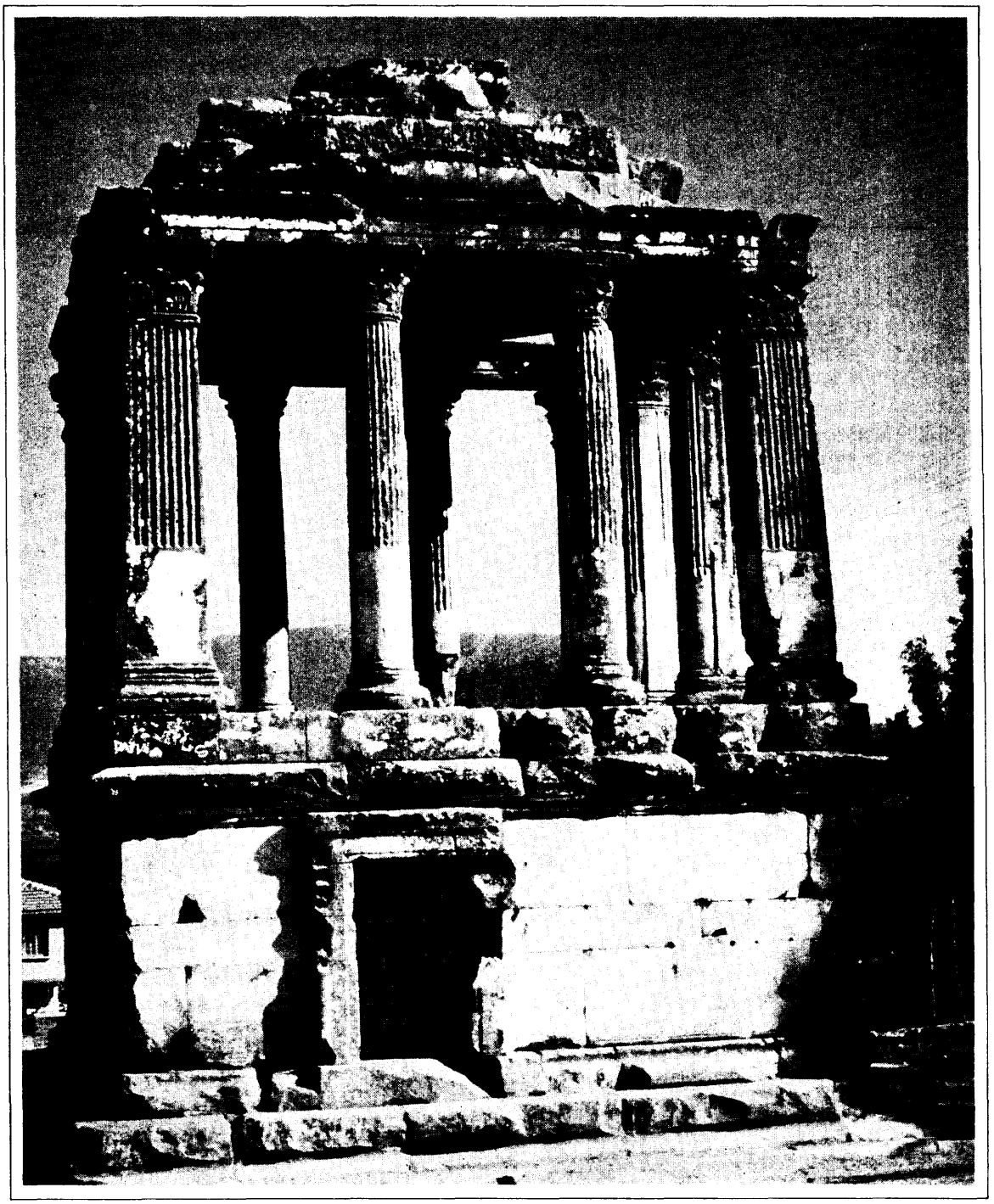
その好対照がフランスの現状を語ったバヴァルダ氏で，今やイスラームがフランス第二の宗教人口を形成するという中で，中高等教授資格試験（アグレガシオン）からアラビア語を排斥する閣議決定の下されたことを憂慮する同氏の談話には，自国の文化行政の政治性に対する一種の澄んだ達観と諦念までが伺われた。

ともすれば支配対被支配の記憶の中で，西欧側のオリエンタリスムに見合う水準にアラブ側のオキシデンタリスムという視点を導入できずにいる現状を前にする時，日本人の離見の見が認識論的風穴をうがつことにもなる。調査者の被調査者に対する優位に安住するのではなく異生活圏の滞在家庭で体験する絶えざる両者の葛藤そのものに前客観的視座の尊さを見る宮治美江子教授の所感が参加者の共感を誘ったのもそれゆえであるし，また座長をもつとめられた小堀巖教授が会期中質問の山をもって示された飽くことなき参加態度と学識とには，政治性のない戦後日本の中東・地中海研究の謂わば負の政治性ゆえの負目をも逆手にとった，熱く澄んだ極東のまなざしがあった。来年ボローニャの大会にもなお一層の交叉せる視線と読解とを期待したい由縁である。

（非会員　比較文化・美術史）

研究会「ヨーロッパ・アラブ夏季大学に出席して」（10月31日　小堀巖・宮治美江子発表　於上智大学）の発表要旨はこれをもって代えさせて戴きます。

（編集部）

地中海学会月報 105

COLLEGIUM MEDITERRANISTARUM 1987|12